

著者略歴

■ 玉上茶六朗（本名・三郎）

明治三十八年三月七日 埼玉県浦和市で生る。父は星光・長兄は茅村・次兄は草夢と号して、みな俳人だった。
・初めて投句した俳誌は「麗和」、関係した俳誌「ちまき」「うつ蟬」「黎明」「句と評論」「芝火（東虹）」「枯野」「天の川」「耀星」・主宰した俳誌「青冠」「新瑠璃」・現在「俳句ポエム」「想思樹」「七曜」・新所沢俳句教室で指導。

・昭和四五年第一回埼玉文芸賞（俳句部門）を受賞

・現在 埼玉県俳句連盟常任理事・現代俳句協会々員

■ 玉上千代子

大正二年四月八日 東京・京橋で玉上清吉の長女として生る。府立第六高等女学校卒。昭和一四年に茶六朗と結婚。初めて投句した俳誌は「芝火」で茶六朗と共に「天の川」「土上」などに投句。

・現在 新所沢俳句教室

現住所 埼玉県所沢市美原町二―二九三九

電話（〇四二九）四二―三三二五 二三五九

句集 愚父伝

著書 玉上茶六朗・智香子

昭和五十四年二月三日発行

頒価 二千五百円

発行者 小久保 誠

発行所 株式会社・明広

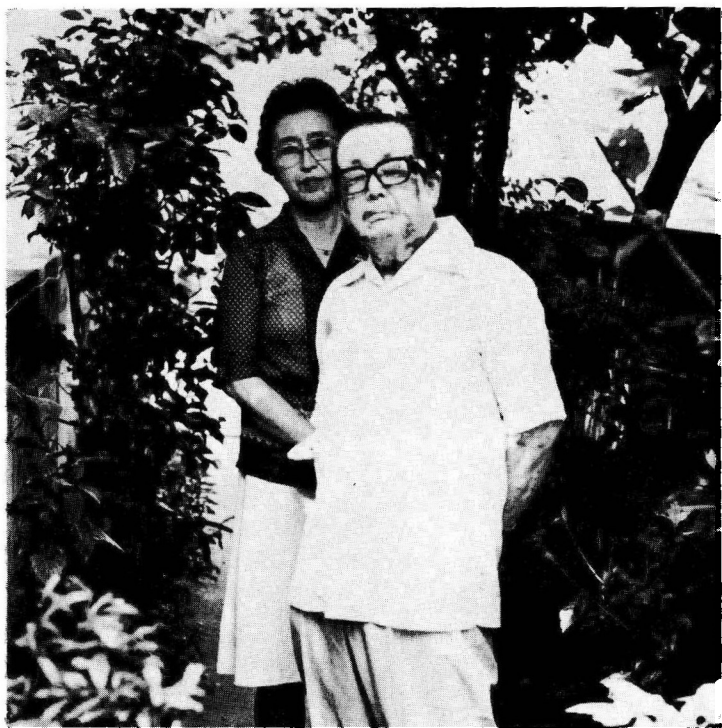
東京都品川区上大崎三ノ一四ノ三〇

〒141 電話〇三―四四七―〇四九三

印刷所 株式会社 共立社印刷所

愚父傳

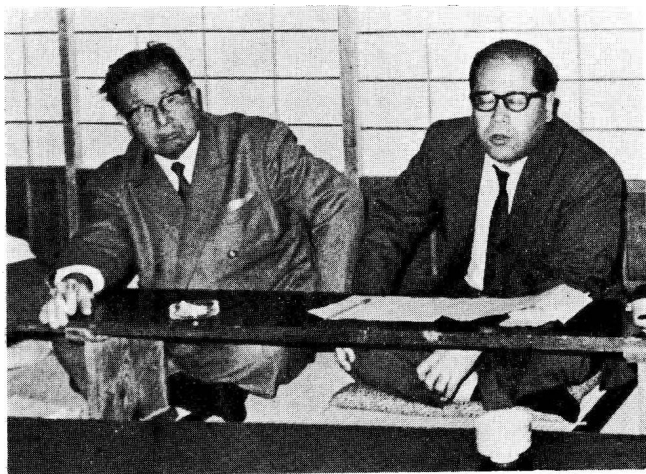
玉上茶六朗・智香子句集



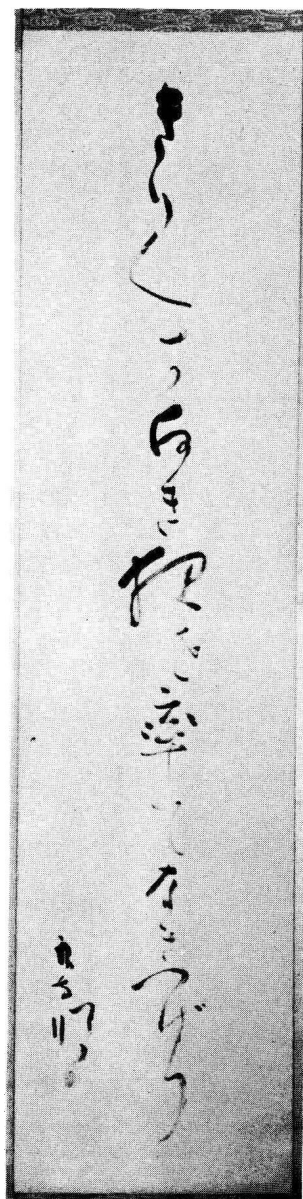
著者近影



△大泉の新興キネマ撮影所を見学—前列右が禪寺洞・左が「雲母」の犬塚梵江氏のなを女夫人。後列右が茶六郎で当時31歳、一人おいて島東吉氏、左端は女優若草ゆり。貴重な一葉である。

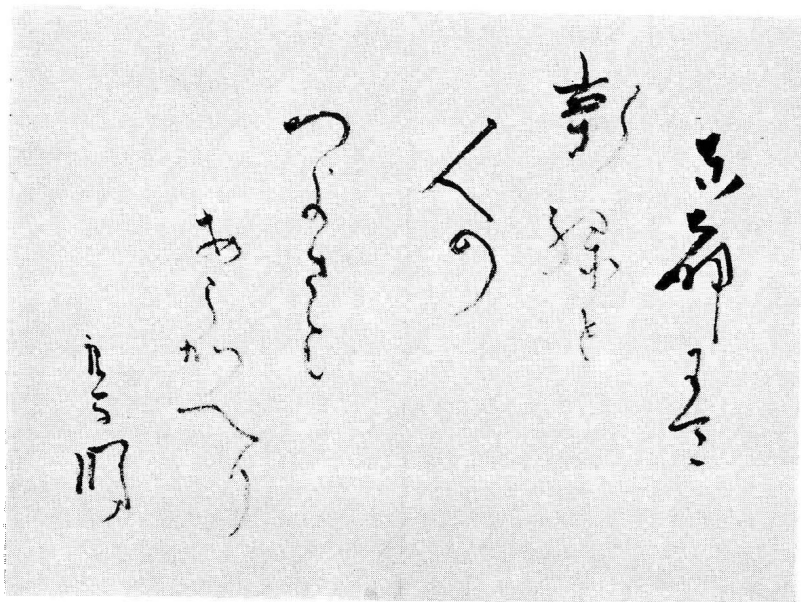


△兜太氏の序文に出てくる信州・伊那松島の澄心寺でのスナップ。右が兜太氏で左が茶六郎—兩音がはげしかった。



きりぎりす白き夜を卒てなきつげり

禅
寺
洞



△この句は昭和11年禅寺洞が上京した折、東京を詠んだ句の中的一句、現在の著者の自宅へ泊ったとき、前頁の「きりぎりす」の短冊の句と共に、茶六朗のために染筆してくれたもの。この作品は定本禅寺洞句集の167頁に“東都23句”と前書した中的一句として所載。

序

茶六俳諧

金子兜太

玉上茶六朗と信州は伊那松島の澄心寺に一泊したのは、かれこれ十年前の中秋だった。

この人が俳句大会を計画し、見学玄や私を誘ったのだが、あいにくの雨で、とくに大会当日は堂をゆるがすほどに冷たい雨が降りつづいたため、参加者は数えるほどしかなかった。

夕方になってやっと霽れて、紅葉した伊那の山空に夕焼を見たが、後の祭。

しかし私にはいくつかの収穫があった。茶六朗という奇妙な俳号の人とゆつくり時をすごすことができたのもその一つ。そのときが初見ではないが、たいした話をしたこともなかったのだから、初見にひとしい。

といって、特段のエピソードがあったわけでもない。あまり喋らない人のようにおもえたが、雰囲気は沈黙者の重苦しさではなかった。河豚のような、ぶくつとしたふくらみが、

なんとなく忙しそうにしていた。それは、性せ、つ、か、ち、に加えて、参会者の出足がまったくよくないためとわかった。まこと、河豚のように口を突きだして、いらだたしげに、困ったように、顔をあちこちに向け、体をゆする。動きがとまったかとおもうと、雨音のひびく天井を睨んでいる。

私はあとになって、茶六朗作の「ふぐちりやあふるることきわがいのち」を読んだときこのときのことを思いだして、おもわず吹きだしてしまったのだが、〈困惑の茶六朗〉は、いのちあふるる茶六朗の有り態だったのである。

その後いくつかお目にかかっているし、句も茶六朗の名があれば読んでいる。そしてますます俳諧の一態ここにあり、とおもうようになってもいる。私は、俳諧とは、へおのれの情を伝えるための工夫と理解しているから、一部の人がいうように、「俳」とはこれこれかくかくのものなりと限定することは、間違いとおもっている。そうすることは、俳句にテーマを与えてしまうことになり、「俳諧自由」（去来抄）を失わせることになる。それぞれに俳諧あるべし、と私はおもう。

そうおもっていると、ときどき、こういう俳諧なら情がよく伝わるだろう、と感心する俳句に行き当たるときがある。その場合、作者と句の印象のあいだに、ほとんど隔りがないこともおもしろいのだが、茶六朗と茶六朗俳句にも、澄心寺以来それを感じているのである。それを「童心」といいたい。生き身の大人のなかに、他人よりかなり余分の面積をとって居着いている、ぎよろぎよろした童心であって、たとえば、「偽善樂し孤児にセーター胃には美酒」「枯木ら笑え悪人茶六退院す」などと偽善者ぶるところも童心である。「梅雨夜光ビルは巨大な棺である」と正面から押しまくるのも童心。「台風来森のこびとらキキと笑う」とおもしろがるところも童心。

この句集は智香子夫人の作品も収めているのだが、こちらはじつにきちんとしている。そのうちの二句を掲げて、やんちや大人を支える夫人の御苦労に報いたい。

真闇来て虫のみ生きる地のしめり 智香子

心音とたたかう一夜のきりぎりす

愚父伝に寄す

柴田白陽

私は昭和十一、二年頃九州から発行されている吉岡禪寺洞主宰の天の川に参加し、その東京支社句会が横浜の伊勢崎町で開かれた折、出席してその時出会ったのが、茶六朗、岩崎健次郎、幡谷東吾（当時梢閑居）氏らであった。水明の故星野茅村さんを兄とし、玉上家に入婿して、玉上茶六朗となる。夫人の智香子さんは当時美人として令名高かったが、茶六朗さんが、その金的を射止めた感じだった。

その後戦争を含めた永い星霜を経たのち、相思樹が発刊されて、中期から客員となり、爾来旧交を深め、今日に到った。

性来酒量多く句会では人間性を露はにして男同志の裸かの交際をするようになる。本来天衣無縫、些事に拘泥せず、大人の風格がありかつ、俳句にかけては天才的才能を有し、

俳句の鬼と自らが称することく、人生の大半を俳句に傾倒している。

茶六朗さんから俳句と酒をとったら何が残るだろうか。それほど鮮明な性格をもつ同氏から生れ出る俳句が、独創的でない筈がない。全国的な俳誌を主宰する才を持ちながら、恬淡としている性格がまたたまらぬ魅力となっているのである。この辺が人間茶六朗が滲み出ている今の俳壇に得がたい存在であり、一服の清涼剤でもある。

作品については既に自由弄放な表現は定評のあるところ、一方に輕妙剽逸の面をもち、他方にロマンを漂わせ、裏返せば、人生の哀歡をそそる。

花椿に佇ちて悲しびもてあそぶ

溝の中で枯葉互いにぬくめ合う
降る落葉わがうすぎ胸吹き抜けて
空の匂いが欲しくて枯野行き戻る

作者の真摯な感情が昇華して、一方の人間的な魅力ある作風を示す。

賭の眼が梅雨濃き海へ充血す

巢鳥たちは地球焦げてること知らず

螺旋階段と枯木の握手酒にしよう

新宿の人間の川を雪で埋めろ

これらの句は作者の本命かも知れぬ。ニヒルで一時期の新興俳句、現在言うところの前衛